何があってもおそれず、ひたむきにまっすぐ進む（努力する）こと

一往直前

令和３年２月２４日(水)
豊田中学校　第１学年
学年通信　第 44 号
文責　渥美　直和

１年生のまとめに向けて

各クラスで２月 26 日（金）の志 発表会に向けて発表の練習を行っています。各自が将来やってみたい、またとても興味がある職業についていろいろな形で調べてきました。その過程で分かったことや感じたこと、必要な資格等についてまとめています。発表の形式は、紙芝居形式だったり、ポスター形式だったりとそれぞれの発表がやりやすいかたちを選んで行っています。現在は、発表原稿を推敲したり、本番形式で練習したりと、完成に近づいてきています。

なお今回、参観日に保護者の皆様にも見ていただくわけですが、コロナ禍の状況の中、お子様の発表に近い時間に来ていただき参観していただくことになっています。発表順については、すでに生徒を通してお知らせしていますが、裏面の QR コードから、Microsoft Teams に入っていただき、Teams の ID とパスワードでログインしていただければ、各クラスの部屋に発表順の表が添付されていますので御確認下さい。よろしくお願いします。

１－１の部屋	１－２の部屋	１－３の部屋	１－４の部屋	１－５の部屋

生活のヒント

メンタルトレーナー・心理技術アドバイザー、梯谷幸司氏さんの『自分のままで突き抜ける無意識の法則～人生を“思いのまま”に変える最強の心理メソッド』にこんな話がありました。

～2011年の東日本大震災のとき、東京では計画停電が行われました。社会全体が滞って、スーパーやコンビニから食材が一気になくなったのです。私のクライアントに、都内で中華料理店を営む店長がいます。首都圏が落ち着いた4月中旬、私はその店に足を運びました。どこの飲食店も売上は落ちていたので、この人の店も例外ではないだろう。内心そう思いながら、私は彼にこう尋ねました。

「この震災で、どういう影響がありましたか？」すると、こんな興味深い話を聞くことができました。この人の店のスタッフはほとんど中国人だったので、ほぼ全員が本国に帰ってしまったそうです。ところが、これまで下っ端扱いっされていたいちばん若いスタッフが１人だけ残りました。そして、こんな意外なことを言ったそうなのです。

「こんなときだからこそ、あたたかい食事で地元の人たちを元気づけましょう。今は利益のことは考えず、残った僕たちだけで何とか店をまわしましょう」店長は驚きましたが、すぐに納得しました。

「それもそうだな、ただでさえ世の中が不安なんだ。この際利益は度外視して、今いるスタッフと今ある材料だけでやっていこう」

そして停電の中、店にろうそくを立て、何事もなかったかのように営業を再開させたのだそうです。

店のスタッフがいつもの調子で営業していますから、この店に来たお客さんたちは大きな安心感を得たことでしょう。その話を聞いて、私はピンときました。すぐに経理の人に、「震災後１ヶ月間の売上が見たいので、売上日報を見せてください」と頼みました。果たして私の予想通り、この店の売上は、前年の売上を超えていました。

「梯谷さん、聞いてください。震災が起きたことで、自分が想像もしていなかったような変化が店に起こったんですよ。まず、ふだんは偉そうにしているのにいざというときに逃げてしまうような幹部がすべていなくなりました。その結果、今まで幹部の影に隠れていた一人のスタッフがメキメキと頭角を現し始めたんです。彼は、『こんなときだからこそ通常通りの営業をしましょう』と他のスタッフたちを説得してまわってくれました。今では、彼が立派な幹部ですよ。」

つまり震災のおかげで、うちの店は本当にやる気のある人だけ残ってもらうことができた。僕は、そんなふうに考えるようになったんです。「なるほど」と私は思いました。つまり、この人は「この経験は、自分にとって悪いことだけではなかった。本当は“何らかの気づき”をもたらすために起きた」と解釈を付け直したわけです。そして、そういう人のところには、本当にお客さんも戻ってくるのです。～

何か大きな災難や嫌なことが起きた時、「これは、自分にとって何の意味があるのか」と問いかけることはとても重要です。特に新型コロナウイルス騒動は、これまでの物事の見方や捉え方の大きな変化が顕著になりました。これまで固く信じられてきた世の中の常識や当たり前が瞬く間に更新されていったり、新たな世界での常識が形成されたりしています。そこで、「このコロナ禍は自分にとってどんな意味があるのか」「このコロナ禍を通してどんな学びがあったのか」を問い続けることは、今一番必要なことです。「変化を受け入れ、新しい時代と新しい自分をつくっていこう」という人たちは、たとえ一時的にはどん底を経験したとしても、タフにやっていくでしょうし、どん底の後には飛躍的に伸びることができるのではないでしょうか。まさに、学年目標の「一往直前」の精神です。本書にある言葉なら、起こる出来事とダンスをするように、楽しみながら寄り添っていく。いわば人生とダンスしようということです。